

庭鐘と異類婚姻譚

——『繁野話』第三話を中心に——

閻 小妹

明和三年（一七六六年）、都賀庭鐘の古今奇談シリーズの第二作、『繁野話』が刊行された。第一作の『英草紙』から、実に十七年間の隔たりがあった。内容的にも、主として白話小説を翻案した『英草紙』と違って、『繁野話』の原話には、唐代の伝奇小説も採られるようになった。^(注1)

本稿では、『繁野話』巻二に収められている「紀の関守が靈弓一且白鳥に化する話」（以下「紀の関守」と略す）を取り上げて、その原話、唐代の伝奇小説「任氏伝」との比較を通して、『繁野話』における庭鐘の翻案思想と方法を探ってみようと思う。

まず「紀の関守」の梗概と原話「任氏伝」を比較対照してみよう。

任氏伝	紀の関守
1 唐の時代、都の長安。章峯（貴族）の所に親戚の鄭六（貧士）夫婦が寄食している。	いつの時代か、紀泉の境。山口庄司次郎有友（貴族）の所に同族の雪名夫婦が寄食している。
2 鄭は町で出会った美女（狐）である任氏を妾にする。	雪名の妻、小蝶（狐）は、雪名の父が買ってきた婢であった。

3 章は任氏的美貌にほれて、手ごめにしようとしたが、拒否される。

4 章は任氏のしたたかさに感心して、以後鄭と任の衣食をすべて提供する。

5 任氏は超能力を用い章のために美女を斡旋し、鄭に金儲けをさせる。

7 鄭の赴任に同行する任氏は、獵犬に正体を見破られて、喰い殺されてしまう。

8 鄭は任氏の正体を章に告白する。

庄司次郎は小蝶の上品なふるまいなどに心を引かれて、手ごめにしようとしたが拒否される。

庄司次郎は小蝶のしたたかさに感心して、好きな狩獵を自粛し、風流な道に心を注ぐ。

小蝶は、庄司次郎の縁談を持ちだして、うまくまとめる。

和泉国の旧族、夏人が妻の紀^か念、弓を捜して、紀泉の境にやってくる。

庄司次郎の招待に出席する小蝶は、席上に掛かっている虎の絵に正体を見破られ、どこかへ逃げてしまう。

庄司次郎、雪名、夏人三人ともに同じ夢を見る。夢では、小蝶は庄司次郎の狩獵好きを止め

<p>9 作者は任氏の貞操と献身の精神を讃える。</p>	<p>るために女に変身したことを告白する。 男三人は、それぞれ歌を作り、小蝶を慕う。</p>
------------------------------	--

以上の比較を見るに、構成上「紀の関守」のほうは「任氏伝」を負うことが大きいものの、夢物語に再構成されるという違いがあった。また「紀の関守」の項目六番にあたる内容は『今昔物語』巻三十「人の妻、化して弓と成り、後に鳥と成りて飛び失する話」などに見られる手束弓の故事によるという。^(注2)要するに、「紀の関守」は、中国大陸の女狐の古譚と、日本の人妻が弓と成り白鳥となって消えた古譚とを、とりあわせて、新しく構成したものであった。^(注3)

(一)

『英草紙』には見られなかった、いわゆる異類婚姻譚が、『繁野話』では、「紀の関守」以外に、「白菊の方猿掛の岸に怪骨を射る話」(巻二の上、下)という話もあった。その原話「白猿伝」が、やはり唐代の伝奇小説であった。^(注4)

ここで注目したいのは、「任氏伝」と「白猿伝」この二つの異類婚姻譚が、また同時に『虞初志』の巻八に収められていることであった。

「当時最新流行の舶来文学、明代白話小説を多く粉本した庭鐘が、今さら目あたらしくもない唐代言小説を粉本したのは」、「任氏伝の趣向のユニークに由来する」と言われているが、私は、むしろ、『虞初志』の日本渡来の時期に大きく関係していると思う。

『虞初志』というのは、明の嘉靖年間に刊行された、いわば一種

の短篇小説集(文言小説)であり、その大半は、唐代の伝奇小説で、ほかに梁の志怪小説も十数篇が収められている。『虞初志』の日本渡来は、西岡晴彦氏の「江戸時代渡来漢籍について——(小説・戯曲——)によると、江戸初期の明暦三年(一六五七年)のことである。^(注7)これは、白話小説『醒世恒言』(承応二年、一六五三年)、『喻世明言』(寛文八年、一六六八年)の日本渡来とほぼ同じ時期になっている。

庭鐘が『虞初志』に興味を抱いたのは、彼の漢籍読書ノート『過目抄』^(注8)から窺われる。

『過目抄』第七冊には、袁棟著『書隱叢説』巻三「虞初志」の條全文が抄記されている。

「虞初志俱唐人小説大抵率寓言也其中儘有驚語感慨之処長夏涼窓披読之覚兩腋生風但可爲捉塵之間譚不可爲整襟之危論。」

(傍点は『過目抄』による)

(虞初志はみな唐人小説であり、そのほとんどは寓言ともいえるものである。其の中に驚くべき、感心すべきものばかり、長い夏に涼しい窓際に依り、此を読むと、両腋から風が生じてくると覚える。但し、此は塵を握るような閑談にすぎないが、襟を整る正論にすべからず。)

さらに、『過目抄』第十二冊には、『虞初志』についての抄記が見られる。

「湯臨川虞初志原本未傳作者氏號載考委宛餘編虞初爲漢武帝時小吏衣黃乘輜采訪天下異聞蓋以是名書矣。」

右の抄記は『虞初新志』^(注10)の凡則十則の第二則の一部であるが、第二則の原文は次のようである。

「虞初志原本不載選者姓名湯臨州續編未傳作者氏號俱爲憾事或屬闕文載考委宛餘編虞初爲漢武帝時小吏黃乘輜采訪天下異聞以是名書亦猶志怪之帙即齊諧以爲名集異之書本夷堅而著讀。」

（『虞初志』の原本には編集者の名前は載せていない。湯頭祖の続編にも作者の氏号が伝わっていない。ともに残念なことである。或いは脱文であるかもしれない。詳細に餘篇を考するに、虞初が漢の武帝の小役人であり、彼は、黄い服を着、輜に乗って、天下の異聞を採訪し、是を以って書名にしたのである。亦、志怪の帙は『齊諧』で有名であるが、集異の書は、『夷堅志』が著名なはずである。）

ところが、庭鐘にとつて、『虞初志』の序文に見られる新しい小説の創作方法そのものが最も重要な意味を持っていると思われる。

「夫尼夫刪詩、並存桑濮、丘明立傳、兼綜怪迂、苟小道之足觀、斯硯儒之不棄者也。劉堤敦劍、諛浪於蒙莊、佞倖滑稽、恢諧於司馬良有故哉。從是以降、諸家鼓吹、百氏簧鳴、豔奇聞以資話柄、則野老畢其長、希怪見以茂談叢、則稗官窮其巧、於是小説之繁、莫可殫紀。支言瑣語、鏗鏘之若洪鐘、委巷深閨、慘過之如雷鼓、蓋亦藝林之刺枝、而文苑之餘葩也。……」

（孔子が『詩経』を刪るとき、桑濮（淫らな事）を並べ、左丘明が『春秋』を書く時、奇怪をも入れた。かりに学問ではなくとも、十分読むに価値があるので、このように大学者にも採り入れられている。思いきってひょうきんなことを書いたのは莊子であるが、虚妄でユーモアたっぷりの世界を作ったのは司馬相如である。それ以後、百家に鼓吹され、百氏に歌われる。奇聞を求め、話の種にして、野老たちがそのすぐれた部分を補充して完全にする。怪見を求め話の内容を豊富にして、稗官た

ちがそれを美しい文章にこだわる。これによって、小説が盛んになるのはいうまでもない。……これは文学という樹木の枝であり、文学という花園の中の一束の花でもある。……）

文人の間では、奇聞や怪見などを好んで話の興に備え、そして、こういう奇聞などを美しい文章で表現し、演義しようとする姿勢が中国の儒学者にはあった。小説というものは文人の手によつてますます繁んになるのであるが、小説は文学という巨大な樹木の枝であり、あくまで興味本意なもので、閑談にすべきものである。

これは、『虞初志』の序文に見られる小説論とその創作方法ともいえるものであった。

「十八世紀の「小説家の学者」（『三都学士評』）庭鐘は、本職は古医方の医学講師であった。流通商業都市大阪で人と成り、生きた人であるだけに、文化の開明性を信奉し、人間存在の合理性を確信していた人であった。そういう人にとつて、異類婚姻譚、もしくはそのまがいのものが、蒙昧でよこしまで猥褻で、いかがわしきに過ぎる妄誕でしかなかったことは容易に推測できるのである。」^(注1)

しかし、庭鐘は、『繁野話』で積極的に「任氏伝」や「白猿伝」のような異類婚姻譚を取り上げている。彼は『繁野話』の序文で「卑説憶談、名区山川、古老の傳聞、士人の口碑、此に述べざれば世に聞ゆまじき」ものをすべて、「国字小説」構成の素材として扱おうというのであった。

「近路行者三十年前、國字小説數十種を戯作して茶話に代ゆ。……往に通家に寄せたる筐の中より、冊子をとり擧げ、紙魚を拂ひ、興へんとして、其榛蕪を恐れ、閑談を恥ぢて沈思する所あり。……彼是九種、並に長談なりといへども、卑説憶談、名区山川、古老の傳聞、士人の口碑、此に述べざれば世に聞ゆま

じきを、是が演義して長き日の興にも備ふべし。実にや鶯の谷より出づる聲なくばと此草紙を愛れど、彼しるべなき暗に月もおもふ愚の心もて、華房の枝葉しげしげなる野話なればとて、作者の自厭はるゝも、大方の誹に先だつ自明ならんかし。

……」

庭鐘が、この序文で言っている「士人の口碑」は、「任氏伝」や「白猿伝」のような唐代の伝奇小説を指しているとも思われる。なぜならば、唐代の伝奇小説は、最初は、文人の間に口で伝わっているというのであつた。^(注1)「任氏伝」や「白猿伝」の結尾には特にこういう特徴がはっきりと表されている。

「建中二年、既済自左拾遺、於金吾將軍裴冀、京兆少尹孫成、戸部郎中崔需、右拾遺陸淳、皆歸官東南。自秦徂吳、水陸同道、時則遺拾朱放、因旅遊而隨焉。浮潁涉淮、方舟沿流、晝讌夜話、各徵其異說。衆君子聞任氏之事、共深歎駭、因請既済傳之以志異云。」

(建中二年、既済が左拾遺の職から、金吾將軍の裴冀、京兆少尹の孫成、戸部郎中の崔需、右拾遺の陸淳とともに、皆東南の地へ流されることになった。秦から呉に行く途中、水路も陸路も一緒だった。時おり拾遺の朱放も旅をしているので、一緒に随いてきた。潁という川を浮べ、淮河を渡った。舟を並べて川に沿っていた。昼は宴会、夜は話をし、それぞれめずらしい話を披露した。みんな任氏の事を聞いたら、深く感嘆した。それで既済に頼んで書き残してもらった。)

つまり、「任氏伝」の話は最初に流された役人(文人)に語られたものであつた。

「唐歐陽率更貌寢、長孫太尉嘲之、有誰言麟閣之畫此一獼猴

之語、後人緣此遂托江揔撰傳以誣之。蓋藝家游戲三昧。如毛穎華革之流爾、吾党但貴其資談、徵供諧噓、安問其事之有無？」

(唐の歐陽率更が寝る時、太尉の長孫に嘲われた。誰かが、麟閣にこの獼猴のことを書いてあると言った。後の人はこれを以て江揔に依頼して物語を書いてもらった。これは文人の游戲三昧なもので、筆を使う人たちの遊びである。われわれは、ただその話のめずらしさに興味を持ち、みんなに笑う材料を提供するのであつて、内容の信憑性について、全く関心を持たないのである。)

「唐代の士人たちは、珍しい話を聞きたがり、それを聞けば、すなおに感嘆した。感嘆すれば、その場限りでは惜しいから書いておこうということになる。」このように、唐代の伝奇小説は、「士人の口碑」でもあつた。

「任氏伝」や「白猿伝」などを「士人の口碑」と言うなら、「手束弓の故事」は、まさに「古老の傳聞」であろう。

『今昔』の「手束弓の故事」には「此の語り、奥怨しく、現にも思えぬ事なれども、旧き記に書きたる事なれば、此くなむ語り伝へたるや」と、付されているが、これは、庭鐘の言葉でいうなら「此に述べずんば、世に聞ゆまじき」のことであろう。

しかし、「庭鐘は口碑採集者ではなく、語り部でもな」い。「口碑、伝承を手掛かりとして、またそのスタイルを借りることで、奇談の場を保証する、さらに言えば、虚構の場を確保してゆくという」のであつた。^(注1)

一方、庭鐘が、「任氏伝」や「手束弓の故事」のような異類婚姻譚を「演義」して、「国字小説」に創作するに際して、新しく取得した「鬼神論」^(注1)、「歴史論」を持って、基本姿勢としていることを認

めなければならぬ。

「又古の怪事を聞て、今見ざるを以て疑をおこすもあり、古へに有しを以て今もありとして理を誣るもあり。又古あるの事は今もあり。今なきの事は古へもなしといへるは、時変をしらざる夏虫の見なり。」（『白菊の方猿掛の岸に怪骨を射る話』）

「現在を絶対化し、現在に立って過去を見ようとすれば疑い、起こさざるをえず、過去を絶対化し、過去に立って現在を見ようとすれば理を誣ることになる。このように、主体の認識が時間に制約され、時間に条件づけられているなら、現在に立って現在を見るように、過去に立って過去を見る作業をくり返すことによつて事物の変化を認識しなければならないだろう。これが庭鐘の「時変」が意味する認識論であり、歴史論でもある。」と、佐藤深雪氏は、庭鐘の歴史論を「自然科学的な認識論」と高く評価している。^(注16)

ただし、ここで指摘しておきたいのは、庭鐘のこのような歴史論に大きく影響を与えられたのは、『虞初新志』の存在であった。

『虞初新志』というのは、清の張潮が編集した筆記小説集である。日本渡来は宝暦十二年（一七六二年）のことであるが、庭鐘は『過目抄』の第十二冊に『虞初新志』を抄記している。その『虞初新志』の序文には

「古今小説家言、指不勝僂、大都鉅訂人物、補綴欣戚、累牘連篇、非不詳贍、然孟叔敖、徒得其似、而未傳其真、強笑不慳、強哭不戚、烏足令就奇攬異之士、心開神釋、色飛眉舞哉況天壤間瀾氣卷舒、鼓盪激薄、變態萬狀。一切荒誕奇僻、可喜可歌可泣之事、古之所有、不必今之所無、古之所無、忽爲今之所有、固不僅飛仙盜俠、牛鬼蚊神、如夷堅豔異所載者爲奇矣、虞初一書、湯臨川稱爲小説家之珍珠船、點校之以傳世、洵有取爾也、

獨是原本所撰述、盡披唐人軼事、唐以後無聞焉、臨川續之、合爲十二卷、其間調笑滑稽、離奇詭異、無不引人着勝、究亦簡帙無多、蒐采未廣、予是以慨然有虞初後志之輯、需之歲月、始可成書、先以虞初新志授梓問世、其事多近代也、其文多時賢也、事奇而覈、文雋而工、寫照傳神、彷彿畢肖、誠所謂古有而今不必無、古無而今不必不有、且有理之所無、竟爲事之所有者、讀之令人無端而喜、無端而愕、無端而欲歌欲泣、誠得其真、而非僅得其似也、夫豈強笑不慳、強哭不戚、鉅訂補綴之稗宮小說、可同日語哉、學士大夫酬應之餘、伊吾之暇、取是篇而瀏覽之、匪惟滌煩祛倦、抑且縱橫俛仰、開拓心胸、具達觀而發曠懷也已。」

（古今小説家は数えきれないほどあるが、それは、大体人物を飾って、人の喜びや悲しみを適当に補うことだけで、冗長で煩わしいものである。詳細で分量もあるが、優孟が孫叔敖のことをまねする如くに、ただ似ているだけであった。そのようなものを読むと、強いて笑うが、喜ぶには至らず、強いて泣くが、悲しい気持になれない。それで、どうして奇に耽み、異を捜そうとする人の心を開かせ、感動を与えることができようか。まして、宇宙には大気が動き、撞けあって、その変化はまちまちである。それはすべての妄誕、奇怪、喜ぶべき事、驚くべき事、歌うべき事、泣くべき事なのである。古に有ったことが、今は必ず有るわけにはいかない。古には無かったことが突然今に有るといふ。よつて、飛仙、盜俠、牛の妖怪と蚊のげけもの、それから『夷堅志』『艶異編』に載っているものは、みな奇怪だと言ふ。『虞初志』という書は湯頭祖に言われると、小説の真珠の船なのである。湯頭祖によつて校正され、世に伝われるよ

うになつたが、まことによいものばかりであつた。ただ原本には唐人の逸話だけ選ばれ、唐以後のものはない。湯頭祖が原本にひきつづき十二巻本を編集した。これはまだ人を笑わせるもの、ユーモアのあるもの、奇怪なこと、人を魅力するものばかりであつた。しかし、所詮、短かくて、内容もそれほど広くはない。そこで、私は、『虞初志』の統編を輯する意欲が湧いてくる。歲月をかけて、本をなすのであるが、取りあえず、『虞初新志』を出版することにした。内容は当代のものが多くが文章はすぐれた文人に書かれたのである。奇怪であるが、詳細に参照考察されている。文章がすばらしくて、いきいきしている。誠に、古に有つたことは、今も有るかもしれないが、ないかもしれない。古に無かつたものは、今も無いと言いきれない。理屈から見れば、有るはずが無いが、実際には有ることもありうる。此を読むと、思わず喜んだり、驚いたりする。また、歌つたり、泣いたりをしたくなるものである。書かれたものは、本物のようで、決してまねをして似ていると思わない。どうして、無理に笑つて喜ばない。無理に泣いて悲しむことにならないのであろう。そして、その飾つたり補つたりする稗官の小説と同じように語られよう。学者、士大夫が仕事の合間に勉強の暇に、是を読むと、煩わしいことを除かれ、倦みを払われるだけでなく、大いに俯仰し、胸を開かれ、達観する心境になるはずであらう。

引用が冗長になつてしまつたが、『虞初新志』の序文には、小説の素材についての見解が述べられている。つまり、小説の素材は奇怪で、めずらしいものでなければならぬ。しかし、いくら不思議なことでも、真事のように描かなければならぬ。そして、序文で

はくりかえして強調されたのは、事物の「有」と「無」の問題であつた。すなわち、事物の変化をどう認識すべきかの問題である。過去に有つたことが、現在も有るとはかぎられない。過去に無かつたことが、現在には有るかもしれない。さらに、現在の理屈、認識からすべての事を理解するには、無理が生じて、その限界を知るべきである。

このように、庭鐘の「自然科学的な認識論」は、直接に『虞初新志』からの影響を受けていると言えよう。庭鐘は、この認識論、歴史論に立つて、妄誕しか見えない、異類婚姻譚のような「士人の口碑、古老の伝聞、此に述べずんば、世に聞ゆまじき」ものを「国字小説」の素材として採り入れたのである。

また、前に述べたように『虞初新志』の日本渡来は、宝曆十二年（一七六二年）のことであるが、『繁野話』の刊行（一七六六年）から、わずか四年前のことになる。そして、『過目抄』第十二冊の抄記は、おそくても、一七六六年前になると推測できる。

一方、『虞初新志』の和刻本が文政六年（一八二三年）にやっと刊行され、その頃から日本の読書界に流行しだした^(注18)ことから考えると、庭鐘は、その半世紀も前に、すでに『虞初新志』を注目し、積極的に吸収しようとする実績があつたと言えよう。

以下、具体的に、「紀の関守」と「任氏伝」の主人公についての比較を試みよう。

(二) 庄司次郎と韋峯

ここでまず主人公、山口庄司次郎有友の人物設定について考えてみよう。

「往古いづれの世にや。紀泉のさかひ、雄の山の関を、山口庄司次郎有友といふもの、家につたへて是を守る。多くの家僕日次を挨めて関をつとむ。……」

庄司次郎の先祖は紀泉の境にある雄の山の関守を勤めてから「幾世幾年をしらず」という大昔の事であった。庄司次郎が「生得心武く、平日狩を好みて、外の楽しみを要めず」ほどの狩猟好きであった。そして、その狩猟好きという性向は、どうやら、彼の先祖と関係がある。家には先祖代々から伝えられた一張の宝弓があり、その宝弓で「鹿鳥の類」、「近村四野の禽獸」などを数しれないほど殺してきたのであった。

今回の調査で、庭鐘が使った原拠資料の確定に至らないものの、東京大学の本居文庫に収められている『山口荘記』の写本が庄司次郎の家柄の歴史的、社会的な位相を見るに重要な手掛りを与えてくれるのではないかと思うので、ここで、その資料の一部を紹介しておく。

まず表紙の裏に 山口荘 名草郡と書かれ、次は村ごとに項目を立てられている。

藤田村、西村、黒谷村、谷村、里村、平岡村、中筋村枝郷日延村、湯屋谷村、瀧畑村。さらに、西村の項に○蔵王権現祠○辨財天祠○西方寺○覺善寺○淡輪戸○坂上○古土坂上姓のような條がある。

古土、坂上姓の條は、次の如く書いてある。

「○古土 坂上姓

家傳に云、坂上田村麿六代の孫、加賀守坂上望城五男、坂上五郎の末葉なり。田村麿、紀伊国逆徒士蜘蛛退治の時、父菟田麿唐土より傳來の薬師如来と戦場に崇りし。此靈頭にて、蜘蛛退治の徳に名草郡山口荘に一寺を建て安置し保養寺と号く。後世、

祇園寺と改めたり。延長年中、坂上五郎先祖の氏佛より依願、別當職を蒙り、紀関守を兼帯して山口荘那賀郡山崎荘三ヶ山村その処々を領す。山口荘谷村に居住せしが、坂上新左衛門明綱元弘の頃、同庄内村に移住して、田村麿の廟は那賀郡山村に祭りて將軍塚といふ、といへり。土姓旧事紀に、元祖坂上五郎の子孫山口荘に住す、依て山口新左衛門といふ……」(五丁)(傍線は筆者)

以上の記述からは、山口新左衛門の先祖、坂上五郎は、元弘の頃山口荘に移住してきたのであるが、紀の関守を兼帯するのが、早くも延長年中にさかのぼる。庭鐘の言う「幾世幾年をしらず」とは、延長年間を指していると思われる。そして、庄司次郎のモデルは、山口荘に移住した坂上の子孫、山口新左衛門であると、推測できる。なお『新撰姓氏録』にも山口宿禰は坂上大宿禰と同祖であると記されている。

また、資料の最後に○雄山関一云白鳥関の條がある。雄の山関について、次のように記述されている。

○雄山関一云白鳥関

古書に見えたれとも、今何れの地かその跡ならむ、さだめがたし、此雄山のうらにてはあらじと見えたり、袖中抄五の巻たつか弓の條に、頭昭曰、たつか弓とは考紀伊國風土記云弓のとかを大きにするなり。それは紀伊國の雄山の関守がもつ弓なりとぞいへる云云。万葉九木國之昔弓雄之響矢用云云この歌と互考するに。此関守強弓の名ありしなるべし。宇津保物語吹上の巻にも所々に関の事みえたれど、作り物語なれば證しがたき上に、その文體によれば吹上はほど近き所の如くにみゆれば、雄山にては合がたし。孝徳天皇紀に大化三年正月、詔曰、初修京

師置畿内國司郡司関塞斥候防人駅馬傳馬及造鈴契定山川とある時などに置たるにや昔廢置詳ならず。もしくは猛獸などありて村民に害をなしけむまに、関をすへて其所の勇士をして守らしめたるなどを関守といへるか。万葉の鹿取靡などある語勢も思ひ合すべし。坂上家の言傳へ日延の蔵王権現の縁紀などに田村丸のち蛛を退治の事などをいへるもかかる様の事を詭傳せしならむか。今西村の小嶋某の家は、坂上姓にて先祖坂上五郎は雄山の関守の末孫なり、など言傳へたり。猶西村坂上の條にもいへることを通考すべし……(三十七丁)

以上の記述では、雄山の関守が強弓を持っていたことを調べられている。そして、山口新左衛門の先祖が、村の勇士で、猛獸から村民の安全を守ったと想定される。

しかし、庭鐘は、「紀の関守」で庄司次郎にそのような勇士像を与えていない。また、庄司次郎の狩獵を、村民の安全を守るというように設定しなかった。庄司次郎が「朝暮狩りくらしして樂と」し、「無益の殺生に狩りくらす徒者」であった。

古代では人間が生きたために猛獸との戦いがあった、その勇士たちは人々に尊敬され、歌われたが、近世になって、人間と動物との力関係が逆転された。無益の殺生に疑問を持つようになった。

「紀の関守」では、庄司次郎の家柄を重んじるが、庄司次郎の狩獵を不満に思っているのは、縁談を一旦断った錦部の高向大夫であった。「山口は古家なり。我懇望する所なれども、今の庄司は無益の殺生に狩りくらす徒者のやうに人いへば、我心に欲せず」

一方、庄司次郎の狩獵好きという性向は、女に興味を示さないことと同時に、風流な心を欠いていることをも意味している。たとえ

「生得心武く、平日獵を好みて外の樂しみを要めず。」「君は此所の勢家として、われに勝加婢妾多くあれど、眼中にあらで、朝暮狩りくらしして樂とす。」「我年来射獵を好み、日々奔走して、いまた婚を議するの念なし。」とあるように。

それでは、視点を変えて、原話「任氏伝」の章峯(庄司次郎にあたる人物)の人物設定をみてみよう。

「有章使君者、名峯、第九、信安王禰之外孫。少落拓、好飲酒。」

(章という長官 がついて、名は峯である。兄弟の九番目で、信安の王禰という人の孫である。年若くて、おおらかな性格で、酒が好きなものであった。)

「峯族廣茂、且夙從逸遊、多識美麗。」
(峯の親戚一族はともも多い。彼は若いときから遊びが好きで、美女との交際もはなものである。)

「任氏伝」で、貴族の出身の役人である章峯は、人物設定において、女遊びが好きな男というイメージを与えられている。だから、女遊びの好きな章峯と、美女任氏との間に必然的に関係が生じる。章峯が任氏の美貌にはれ、凌辱しようとするのは、章峯の女遊びの好きな性格によるものであると合理化されているからである。

しかし、庭鐘は、女好きという章峯像を正反対に女に無関心で狩獵好きな庄司次郎像に作り換えた。主人公庄司次郎の人物設定の改変によって、相手(小蝶)との関係も変わってくるようになった。つまり庄司次郎と小蝶との間にあるのは、男と女との関係ではなく、

無益な殺生に耽ける人間と、人間に殺害されてきた狐一族との対立関係であった。

庄司次郎を狐一族の加害者として設定したことが、「紀の関守」において、どんな意味をもたらしているかについては、女主人公小蝶をあわせて考える必要がある。

(三) 小蝶と任氏

「任氏女妖也。」と、「任氏伝」では、任氏が狐妖であることを、冒頭で読者に明言している。さらに、城外の餅売り老人が鄭六に任氏の正体をあばくと、任氏自身も鄭六の前で狐であることを認める。

「主人曰、吁、我知之矣。此中有一狐、多誘男子偶宿、嘗三見矣、今子亦遇乎？」（餅売り老人が言うには、ああ、私は知っているよ、そこに狐がいるのを。よく男を誘って泊まらせる。かつて何回も見たことがあるが、今日、あなたもその狐に会ったものかい）

餅売り老人の話では、狐に「男を誘って泊まらせる」という姪婦のイメージを与えているのに対して、任氏もこれが常識になっていることを承知している。

「公知矣、何相近焉。」（あなたは知ったのでしょうか。それなのに、どうして近づいてくるのですか。）

しかし、「任氏伝」では、「狐妖」姪婦という伝統的な評価を逆転させ、狐妖「貞婦」というイメージを創り出そうとしたのであつた。^(注20)

任氏は、鄭六に自分が決して人間を害するような狐ではないことを強く主張している。

「凡某之流、爲人患忌者、非他、爲其傷人耳、某則不然。」
（私どもが、人間から嫌われるのは、ほかでもない、人間に害を与えているからです。しかし、私は、そうではありません。）

ここでは、人間を害する狐妖の存在を認めながら、人間を害さない狐も存在していることが強調されている。実際にも、任氏は人間を害さない狐であるだけではない。人間以上の才能を持っており、人間の婦女より立派に貞操を守れた貞婦として描かれている。

自分を大切にしてくれる鄭六のために、任氏は韋蓋の暴力に必死に抵抗する。また韋蓋の好意に応じるために、美女を何人も斡旋する。そして貧しい鄭六に金もうけをさせる。人間がとうていできないことを、任氏はその超能力でうまくやりとげる。

「任氏伝」の作者は、狐妖の任氏を人間より立派な貞婦として讃えている。

「嗟乎、異物之情也、有人道焉、遇暴不失節、徇人以至死、雖賢婦人、有不知者矣。」

（ああ、動物の心にも人と変らぬものがあるのだ。暴力に遇っても操を失わず、夫に殉じて死ぬに至った任氏は、今の婦人でも及ばぬ徳をもっている。^(注21)）

しかし、これは、あくまで、人間の立場、つまり男の立場から、異類である女を描いたもので婦節を守る任氏への称讃である。「狐妖」貞婦でなければ、任氏の存在の意味がなくなる。

一方、「紀の関守」では、「狐妖」貞婦」という主張を、結局の所、認めるわけにはいかなかった。

庭鐘は、「紀の関守」において、一貫して人間に迫害されてきた狐一族の被害者の立場を強調している。原話「任氏伝」で認められた「人間を害する狐妖の存在」は、「紀の関守」では一切認めない。

庄司次郎は動物の加害者であり、小蝶の狐一族の加害者でもある。「我母といふも同じ狐にして、登美の長者が爲に眷属の命を免れる事幾度ならず。……」

美女に変身した狐妖である小蝶には、「じつは一門眷属の生命を救うという至上絶対の目的」があった。^(注22) 正体がばれたあと、小蝶は、人間の男三人に告白をする。

「和泉国の旧族、登美の夏人といふ富民あり。親なるもの代より堅く殺生をいまして、夏人に至りても、只生けるを助くるを以て心とし、他人の殺生をも説きさとして休めしむ。」
 「その報として、彼が家に掃節をとり、猶も雄の山の関守が殺生に耽るを制止せんと念ありて達せず、我其念を續ぎて、先汝が宝弓を取り隠し、我身のかはりとして、重く夏人に預け、大和なる雪名をさそひ出し、此所に来り、汝が魂を迷はしめて、漸く殺生をとどめ……。」

小蝶の告白に明確させたのは、小蝶の夏人への報恩、雪名への愛情、庄司次郎への友情は、ほかのものではなく、狐一族のためであった。「それが庭鐘の小蝶に賦与した異類の論理であり、「義」であったわけである。^(注23)」

庭鐘は、「任氏伝」の作者と違って、異類側に立ち、異類側の論理を主張し、狐妖の小蝶のエゴを正当化しようとしている。

また、小蝶の正体は、「任氏伝」と違って、物語の最後まで隠されていた。正体がばれるまで小蝶は美女であり、貞婦であった。正体がばれると、男たちが小蝶の告白を聞かされる。そして、男たちは初めて気がついた。美女、貞婦の小蝶の存在は、人間の男の願望にすぎない、夢の世界にすぎなかった。彼らは不本意ながら、やっと夢から醒めたのである。

以下、美女、貞婦の小蝶の行動をふりかえって検討し、庭鐘の細かい計算を見てみよう。

まず、小蝶が庄司次郎に迫られる場面を見てみよう。

原話「任氏伝」にも同じ場面があった。任氏的美貌に一目ぼれて、章釜がいきなり任氏に迫った。しかし、任氏の場合と小蝶とは、全く違う意味を持っている。

任氏が章釜に暴力に抵抗するのは、鄭六のために貞操を守らなければならぬのである。

一方、小蝶は、庄司次郎の殺生をとどめるには、庄司次郎を誘惑しようとする計算があったわけである。

初めて庄司次郎が小蝶に会う時、

「竈にあたりて、須叟に十餘枚の蒸餅^(注24)を造り、清き漆器に檨葉敷きて盛り出し、雪名諸とも慇懃に是をすすむ。庄司是を食ふに、其制うつくしく、味田舎の品にあらず、是に茶を下して物語す。妻も時々客位のかたに向ひてかかることなん、なでうあるべき是は得がたきことにこそなどと、物語を引き立て興ずる氣はひ、静間なるが中に媚ありてなみの素性にあらじ。雪名も此女の爲にこそ親にもうとまれ、故郷に得たまらでと思はるる。」というように、小蝶は立派な主婦の役を演じながら、上品なふるまいで、男同志の語に興を立て、そして、色っぽく庄司次郎に媚を感じさせる。

こうして、庄司次郎がたびたび雪名夫婦の所を訪れるようになって。そのうち、「いっしか不良心おこりてこれかれ戯れによせ、情を含みたる詞の端きらめけど」、小蝶は、わざわざ「何とも思はぬさまなり」、夫の雪名にだまっていた。

庄司次郎は、小蝶にますます引かれ、ついに雪名の留守を見て、小蝶を訪ねることになった。すると小蝶「獨りありて便なしと思ひけん、扉の引きよせたるあひだに身をかくし、音せである。」のであった。

「任氏伝」の「任氏戩身匿於扇間」(任氏は身を門の後に隠し

た。)の表現を踏まえながら、「昔より、美女のかくるるは見えんが爲といふなる。」のように昔から美女が身を隠すのは、人に見せようとするためだと、庭鐘は、任氏の行動をまったく違う視点から小蝶に移し、解釈をしたのである。この解釈から、庄司次郎を引っぱっている小蝶の思惑を読者にはのめかそうとする庭鐘の意図が読める。

庄司次郎は、ついに小蝶の望む通り殺生の自爾を誓う。

「我若し此事に二念を引かば、日此好める猟を、病にかゝり、爲すことあたはざる物なり。」

その後、庄司次郎は、「心よわりして、日此の殺生もおこた」った。「それのみならず雪名にかたらひて風月の道に心をよせ、花を賞し、景を翫ぶ」ようになった。

ここで、小蝶は、庄司次郎に縁談の話を持ち込む。

原話「任氏伝」では、任氏が韋葦のために美女を紹介するいきさつもあった。それは、韋葦が任氏のしたたかさに感心して、貧しい鄭六と任氏の生活の援助したこともあって、韋葦が任氏のことを忘れることがないので、任氏は韋葦への報いとして、美女をつぎつぎ紹介したのである。

「任氏知其愛己。因言以謝曰。愧公之見愛甚矣。願以陋質。

不足以答厚意。且不能負鄭生、故不得遂公歡。……或有妹麗、悅而不得者。爲公致之可矣。願持此以報德。……」

(任氏は韋葦が自分を愛することを知り、韋葦に言うには愛されて、甚々しく恥じることですが、この私のようなものは、ご好意に答えるには足りませんし、また鄭六に叛ることもできないので、あなたを喜ばせることができません。もしかしたら、お気に入りの美人を手に入れなかったことがありましたら、な

んとか致します。此を以て、ご恩をお返しします。)

一方、小蝶は、庄司次郎への縁談をすすめるのが、殺生の自爾を固める目的にあったわけである。そこで縁談と殺生の対立をあらためて庄司次郎に確認させた。

「我年来射猟を好み、日々奔走して、いまだ婚を議する念なし。……」山口は古家なり。我懇望する所なれども今の庄司は無益の殺生に猟りくらす徒者のように人いへば、我心に欲せず。」

庄司次郎の縁談は、結局、殺生を止めることを条件としてうまくまとめ、小蝶の目的は一応達することになった。

「刀根子云ふ、實に此事ありといへども、今は全く猟をとどまり、常に過ぎにし事を悔いて、優にやさしき手すさみに心をとどめらるるよし。げにも久しく猟のよそほひを見はべらずといふ。左あらば我壻に取りて恥なきをのこなりと内意解けて、山口庄司老黨をやりて音問を通じ、程なく婚姻を調へける。」

以上分析してきたように、庭鐘は、狐妖⇨貞婦である任氏の人物像を大きく改変してしまった。狐である小蝶は、あくまで狐であった。狐一族のために、貞婦のふりをするが、狐妖⇨貞婦にならなかった。また、小蝶と庄司次郎の関係は、狐、異類、被害者と、人間、加害者の関係であるが、原話の貞婦(任氏)と好色の男(韋葦)との関係にもならなかった。

庭鐘が、このように、はつきりと狐、異類側、動物側に立っているのは「庭鐘の生命力認識は、基本的には、人間と動物を区別しない」^(注25)からであった。

「凡そ生る人並に種々の有情物。皆神ありて物に付き人に託

し。はるかに死鬼の神よりも霊なり。唯身を先にして人の爲を後にす。是生者の天情にして世の人多く免れず。」(「白菊の方 猿掛の岸に怪骨を射る話」)

動物というのは、人間と同じ有情の物であり、そして神あって、物に近くこともあるし、人に託すこともある。死鬼よりずっと霊の力を持っている。その動物たちは、まず自分のために何かをするが、人の爲にすることがその後になる。これは、また生きる者の天情であり、人間とほとんど同じはずである。

庭鐘は、ここで、動物のエゴも人間と同じように認めている。「紀の関守」で、狐が弓に附いたり、美人に変身したりして貞婦のふりをするが、それは、狐一族の命を救うためであり、小蝶のエゴでもあった。これは、また人間である男のために貞操を守る任氏とは根本的に違っているところであろう。

(四) 鄭六と雪名

「任氏伝」では、鄭六という男は、「武骨で直情径行的な愚夫の存在」であった。任氏の正体を知ってもなお慕っている点以外には、何の取り柄のない男として描かれている。^(注26) 作者自身の言葉で言うところ、鄭六は全く教養のない人で、任氏の容色だけに心を奪われた男であった。

「惜鄭生非精人、徒悅其色而不徵其性。」

(惜しいことに鄭六は教養のある人でなかったから、ただその容色に心をうばわれ、その精神をうけいれようとしなかった。)

一方、「紀の関守」における雪名は、鄭六と正反対で、風流人と

して登場してくる。両者の人物設定はあきらかに違っている。雪名の人物設定における庭鐘の意図を少し考えてみよう。

「早習武芸、亦好酒色、貧無家、托身於妻族。」

(鄭六は、幼い時から武芸を習っていた。酒も女も好きな持ち主であるが、貧乏な人で家もなく、妻の実家に居候している。)

貧乏人である鄭六に対し、雪名は村雄の末子で、生まれつきすなおで、溫柔郷の人である。またお金に困らず、風流な道に通ずるものとして設定されている。

「大和の国人橘の村雄といふ人の末子雪名……生得すなほにして、溫柔郷の人……」「国を出づる時囊中に物ありてこそと人皆思へり。」「雪名にかたらひて、風月の道に心をよせ、花を賞じ、景を翫ぶ……」

「溫柔郷の人」であると設定された雪名に庭鐘は、何を託しているのであろう。「溫柔郷の人」というのは、どんな人であろう。

庭鐘は、宝暦五年に出した『開卷一笑』^(注27)の訓釈本で、「狼虎嫖」の言葉に対して「溫柔郷の人」という言葉を使っている。

「是ヲ狼虎嫖と呼テ、溫柔郷ノ人ニアラヌ客ナリ……」(四十四丁裏)

ここでの「狼虎嫖」というのは、嫖客の一種であるが、庭鐘が訓釈した『開卷一笑』巻二「風月機関」の語釈には、「狼虎嫖」と並べて、「和合嫖」、「痴嫖」、「苦嫖」、「遊方嫖」、「眼嫖」、「口嫖」、「當家嫖」、「點卯嫖」、「焼香嫖」、「敲嫖」、「逞強嫖」、「鬪志嫖」など、実に驚くべき多くの嫖客のことが書かれている。^(注28)

『開卷一笑』の上集巻二だけを訓釈した庭鐘は、その内容につい

て、自ら「鄙俗」そのものであったことを言っている。

「鹿」鳴散「人附スルニ譯ヲ懸」河寫「水滑」稽ノ面「目始テ備ル哉矣又奚ソ擇ンヤソノ鄙」俗ヲ哉……」

鄙俗な嫖客の心得みたいなのは、つまり「風月機関」であるわけである。庭鐘が説明するに、「此篇多く嫖客妓ノ爲ニ計ヲ設ルヲ説リ意ヲ着ヘシ」というのである。

俗な男、乱暴な嫖客は「狼虎嫖」といい、一方、文人で、上品な美人「溫柔郷」^(注29)を求める男は、「溫柔郷の人」であると、庭鐘がそういう解釈をしていると考えられる。その背景は、理想的な遊廓、風流の真諦を求める格調高い美文で書かれた中国の艶史が当時日本に伝わっていたことにあると思われる。

庭鐘は『過目抄』の第十二冊で、清の康熙年間に出版された筆記小説『虞初新志』を抄記している。しかし、その内容は『虞初新志』巻二十に収められる「板橋雜記」^(注30)ばかりであった。

『板橋雜記』は数多い中国艶史の中、とくに近世の文人に愛好された作品である。明和九年、山崎蘭齋の訓点で和刻本が出版されて以来、享和三年、文化十一年、とたびたび版を重ねて広く流布した^(注31)ものである。

しかし、庭鐘は、その和刻本が出版された六年前、すくなくとも明和三年以前に手にして読んだのである。これは、『板橋雜記』を舶来した宝暦十二年の後四年のことになる。

『板橋雜記』の舞台は中国の南方に位置する金陵であった。明代初期の首都でもある金陵は北京遷都以後も副都としての位置を保っていた。又文化の面では、北京とともに国子監（すなわち国立大学のこと）は遷都後も存置され、北京のそれと相對して學術文化の中心でもあった。その上、江南は北京に比べて風光も明媚であり、六

朝以来の旧跡も多い。詩囊はおのずと肥え、知識人階級の交遊の中心は自ずから金陵であった。明代の著名な詩人、文人の多くは、金陵に住んだ経験を有するという。そして、彼らの興をいっそう華やかなものにしたのは、秦淮の水楼に住んでいる妓女であった。江南の名士や文人、会試（国家試験）に応ずる書生達を客とする『板橋雜記』の妓女達は、そのほとんどは詩賦に通じ、琴を弾じ、蘭をよく描く佳人である。これらの才子佳人の風貌を艶麗な筆致にとどめ、その風流逸事を縦横に織りなして、金陵煙花の繁栄を髣髴たらしめるのは、『板橋雜記』^(注32)であった。

『板橋雜記』に見える「溫柔郷」の世界は遊客と妓女との鄙俗なものではなく、遊客は才子文人、妓女は上品な佳人で、つまり、才子佳人のロマンの世界であった。

『板橋雜記』の作者、余懷の親友、孫克咸という人は、いわゆる「溫柔郷」を求める一人の男であった。

孫は、文武の才略が有る男である。彼は馬によりかかったままで、千言の文章が立ちどころにできあがるほどの才があり、また弓を引くことができ、両手に矢を放つことも上手であった。彼は女遊びが好きで、酒を思う様飲んで高歌放吟していた。

一方、相手の妓女葛嫩は、その才芸において、世に並ぶものがないという。孫は、葛のことを、溫柔郷といい、自分がこの溫柔郷の世界で生涯を送ろうとした。そして、とうとう葛を身請けして困っていた。

戦争中、孫と一緒に葛も捕えられた。敵の將軍は彼女を犯そうとしたが、彼女は舌を噛み切って、血を口に含み、將軍の顔に噴きかけて、殺され、孫もまた殺されてしまった。

庭鐘が、雪名を「溫柔郷の人」と設定したには、溫柔郷の世界で生涯を送ろうとする男を描こうとしたのであろう。

「溫柔郷の人」雪名は、村雄の末子であるが、父が買ってきた婢、小蝶と家出するのは、彼が家を捨てたということになる。つまり、社会からはみだした存在であり、社会秩序の違反者でもある。

庭鐘が、雪名と対照的に描いたのは、小太郎である。『繁野話』の巻五「江口の遊女薄情を憤りて珠玉を沈むる話」の主人公である小太郎安方は、「生れ清げに、心さま優に、鄙には似ざりけり」という男である。「親の慈心より、萬に欠く事なく取りしたためて」上京して、江口の遊廓に足をはこんでいるうちに白妙という遊女と親しくなる。しかし「眼に見るのみを甲斐とするは眼嬖とそしり、みせぬ君を見きとないへば、口嬖と笑ふも口惜しけれ」のように、小太郎は鄙俗な嫖客のことを教えられる。

庭鐘は、小太郎に「溫柔の性」、「溫柔の人」などの表現を使っているが、「溫柔郷の人」と言わなかった。

「色にたはれて家をすて、親を離る浮浪不義の人」は、まさに「溫柔郷の人」雪名であるが、小太郎はこういう人になるのを恐れている。小太郎は、結局、「郡司家の後嗣であるため、家門継承の責務を放棄して情愛に殉じることとは許されなかつた。」^(注33)このきびしい現実におかれ、社会秩序に順応しようとする（順応するしかない）のは、小太郎であった。

小太郎と正反対に、親に勘当され、小蝶との浮浪生活を送っていた雪名は、「溫柔郷の人」と名づけられている。庭鐘はこの「溫柔郷の人」に托したのは男の夢であらう。

唐代の伝奇小説「任氏伝」と『今昔』の「手束弓の故事」をとり

あわせてできた「紀の関守」は、翻案小説であるが、「国字小説」ともいう。庭鐘が、自分の翻案作を「国字小説」と自負したのは、中国の文言小説、白話小説に挑戦しようとする彼の意欲の明白ともいえよう。「紀の関守」では、人物の設定から、主題まで、「任氏伝」と違った方向、ある時、正反対の方向さえ進められている。異類を人間化（女を理想化）しようとする男たちの願望（「任氏伝」の場合）をみごとに夢物語に転化させた。「紀の関守」では、異類（女）は、男たちの理想の対象ではなく、男（人間）の夢を覚す役割を負っているのである。庭鐘は、そういう異類（女）の世界を讀者に披露して、人間である男たちの夢を覚そうとしているのである。

(注)

- ① 『英草紙』と『繁野話』の特徴については早くから論じられてきた。「英草紙には譚詞小説をそのまま翻案したものが多かった。繁野話では直接支那小説によったものが少なく、しかも翻案を一部の趣向として用ゐる傾向が表はれ、その原拠には唐代伝奇も取られてゐる。」と、宇佐見喜三八氏の論評は、その代表的なものである。
- ② 山口剛氏「読本の発生」(『文学思想研究』4号、一九二六年)
- ③ 高田衛氏著『江戸幻想文学誌』(平凡社、一九八七年四月) P.52
- ④ 「白菊の方猿掛の岸に怪骨を射る話」の原話は、「白猿伝」以外に「陳從善梅嶺失渾家」(『古今小説』巻二十)がある、玉上琢彌氏「白菊の方猿掛の岸に怪骨を射る話」(『国語国文』第七卷第八号 P.176)の論文では早くから指摘された。
- ⑤ 徳田武氏著『日本近世小説と中国小説』(青裳堂書店 昭和六十二年五月) P.117。

⑥ 『虞初志』の成立年代については、上海書店出版部の解説(一九八

六年十月)では、早くとも明の正徳・嘉靖年間になるのではないかと(成書至早也得在正、嘉年間了。)と推測されている。これはおそらく現在内閣文庫に収蔵されている嘉靖年間刊行したものの存在は知らないのではないかと思われる。そして、上海書店の活字本は、明の萬歴年間に刊行された、呉凌の七巻本によるものである。同解説では最初には八巻本の存在があったが、七巻本は八巻本の最後の一卷を刪った(至于陸氏虞初志原爲八卷、大約後來的翻刻本是刪去了最後的一卷。)と推測している。これも内閣文庫収蔵の明の萬歴三十四年刊行された八巻本を見ていないためであろう。実際は、八巻本の内容は七巻本と全く同じである。その違いは、目録だけであり、念の爲、八巻と七巻本の目録だけ抄しておく。

卷一	八巻本(内閣文庫)	七巻本
續齋諧記 集異記 離魂記		
卷二	虬髯客傳 柳毅傳 紅線傳 長恨傳	卷二
卷三	章安道傳 周秦行記 枕中記 南柯記	卷三
卷四	嵩岳嫁女記 廣陵妖辭志 崔少女傳	卷四
卷五	南岳魏夫人傳 無雙傳	

卷八	謝小娥傳 楊媚傳 李娃傳 鸞鴛傳 霍小玉傳 柳氏傳 非烟傳 高力士外傳 東城老父傳 古鏡記 冥音錄 任氏傳 東陽夜怪錄 白猿傳	卷五
卷七		卷六
卷六		卷七

- ⑦ 西岡晴彦氏『法文論業』第四十号昭和五十三年二月P38
- ⑧ 稲田篤信氏、木越治氏によって『過目抄』(天理図書館蔵)の第一冊、第十一冊、第二冊がすでに翻刻された。(富山大学教養部紀要第十九巻一号、第二十巻二号、第二十二巻一号)
- ⑨ ここでの寓言は、いわば莊子の寓言の意味で使っていると思われる。
- ⑩ 『虞初新志』の日本渡来は、大庭修氏著「江戸時代における唐船持渡書の研究」(『関西大学東西学術研究所叢刊(一)』所収)によると、宝曆十二年(一七六二年)のことである。
- ⑪ 高田衛氏著『江戸幻想文学誌』(平凡社一九八七年四月)P64~65。
- ⑫ 前野直彬氏著『中国小説史考』第三章唐代の伝奇(秋山書店、昭和五〇年十月)では、「唐の伝奇のすべてが先ず口で語られ、それが記録されて残ったわけではないが、顕著な現象として、口頭の物語が失行したことはたしかであろう。」と。P167
- ⑬ 同上

- ⑭ 風間誠史氏「近世中期小説の上昇過程」(『日本文学』一九八九年八月) P 59
- ⑮ 庭鐘の鬼神論の典拠について、徳田武氏がいずれ発表される予定である。
- ⑯ 佐藤深雪氏の「都賀庭鐘の鬼神論」(『日本文学』昭和五十七年七月) P 38による。
- ⑰ 大庭修氏著『江戸時代における唐船持渡書の研究』(昭和四十一年十一月)による。
- ⑱ 徳田武氏「読本と清朝筆記小説——『今古奇談』『通俗排悶録』について——」(『読本研究』第三輯上套、平成元年六月) P 57による。
- ⑲ 半紙本一冊、縦25糎横18糎。表紙に「山口荘記」と書いてある。本居文庫は、本居大平の蔵書を収めたものであるが、現在東京大学文学部国文学研究室に収蔵(東大附属図書館の請求番号L五五三七八一—三三四—八三)。なお、本居宣長記念館の吉田悦氏によれば、大平は『紀伊国統風土記』の編纂にあたって、『山口荘記』を使用したと考えられる。翻刻にあたって、徳田武、吉村両先生から御教示を賜わりました。記して深く感謝申し上げます。
- ⑳ 西岡晴彦氏「任氏と嬰寧の間——狐妖イメーシの変容」(『東洋文化』第五十八号、昭和五十三年三月) P 103による。
- ㉑ 前掲西岡晴彦氏の翻訳による。
- ㉒ 前掲高田衛氏の論文 P 65による。
- ㉓ 同上
- ㉔ 『過目抄』第十冊「校正旁抄」には蒸餅についての抄記があった。「晋書」何曾伝、厨膳滋味、過于王者、每燕見、不食太官所設、帝輒命取其食、蒸餅不折作十字不食。……」
- また「開卷一笑」巻二「閨怨歌」の語釈には蒸餅の説明があった。「マンデウハ多ク醃酵トテアマザケニテフクラシタルヲ云館ニ肉菜ヲツ、ミテ料理ニ用ユアン無ヲ蒸餅トモ云又醃酵ノ皮ニ、紅豆ヲ澄セン沙糖餡ヲツ、ミタル製アリ是此邦ノモチ菓子ノマンデウニテ茶食ニ供ス」
- ㉕ 前掲佐藤氏の論文による。
- ㉖ 前掲西岡氏の論文による。
- ㉗ 国文学研究資料館所蔵本を使った。
- ㉘ 『唐話辞書類集』第10集 P 696にも嬈の解釈があったが、庭鐘の解釈と若干違っている。
- ㉙ 『過目抄』第十冊に「西廂記釈義」の語釈に「趙飛燕妹合徳都號為溫柔郷」とある。
- ㉚ 『過目抄』第十二冊十六丁表から、十九丁表までにわたる。
- ㉛ 前田愛氏「板橋雜記と柳橋雜記」(『国語と国文学』第四十一卷第三号、昭和三十九年) P 37による。
- ㉜ 岩城秀夫氏『板橋雜記・蘇州画舫録』日本語訳(『東洋文庫』二九〇、昭和三十九年四月)の解説による。
- ㉝ 田中則雄氏「都賀庭鐘の読本と寓意——義・人情をめぐって——」(『国語国文』59巻1号、一九九〇年一月) P 29による。

附記 『繁野話』の引用は、国会図書館本による。『貞初志』は内閣文庫所蔵明の嘉靖本によるが、句読点は上海書店本を参考にして付した。